

「土方殺すには刃物はいらぬ 雨の10日も降ればよい」という言葉が古くからいわれている。土木工事の施工方法については日進月歩、最新のものが考案され実施されているが、上の古い言葉は相変わらずのようでどうも雪や雨では仕事を休まざるを得ないのが現状のようである。

理科年表を引き出すまでもないが、日本内地の降雨雪の日数は年間相当の比率を占め、そのときは今でも土木労務者は無収入になるのが現状である。

そのうえ近年は関連する産業においては定休日というのが増加する傾向にあるので、せっかく天気でも材料待ちになるとか、機械工事の工程の関連で仕事が休みになるとか、日曜日などで他とよく打合せができないとかで、働きたくても休まねばならぬ機会も漸増の傾向にある。

これらの要素が重なりあって、年間の土木労務者の稼働日数というのは工場の労務者より非常に低いことになる。これは労務者各人の月収にひびくのはもちろんで、たとえ日当が非常に高くても、月の稼ぎ高では余り伸びていないということである。もちろん、土木労務者の日当は他の産業に比し格別上等ではなく、むしろ下位にある現状では、月末の賃銀受取り高が平均して非常に低位にあることはいなめない。

そのうえ現在の社会組織では、土木労務者という職業は決してパツとした職種とはいえず、何か少し下った職業のように世間では扱われている。

収入が少なくて肩身のせまい職業に自分から進んで入ろうという青年が年々減少して行くのは、理の当然と思われる。特に近年は他にいろいろな働き口が増加しているので、農村の次、三男が将来耕す土地もないのにばく然と家事手伝いに追われ、結局終りは土木労務者になって行くというような給源は次第に無くなりつつある。農村の次、三男はどンドン工場等に就職して、農家でまごまごしているような青年は、ほとんどなくなっているのが現状と思われる。

季節労務者というのがある。これは、農村特に雪等の多い寒い地帯で、季節によってまったく働らくことができず、反面可耕期の収入だけでは遊んでおられないので出稼ぎをする人々である。これが、土木工事の労務者の給源として相当の役割りを占めていたことは、十分ご承知のことと思う。ところが、この人々も年々減少して行く傾向にあって、出稼ぎ希望者の絶対数はかなり減っている。また、戦前には外地からの移住者が、炭鉱とか土木工事に出演して相当の部分の占めていたが、今では全く期待できない国情である。老年の外地人労務者が多少

残っているようでもあるが、補充ということは全く無いという現状である。

全くもって、現状では土木労務者というのは割りの悪い職業である。ことに、工事期間が過ぎると他の工事場に移動しなければならぬ。若い独身のときは別として、土木労務者でも年ごろになれば妻君も持って子供も生れる。それを引き連れて工事ごとに引越しをするのはなみたいていの苦勞ではない。特に子供が少し成長して学令期に達すると、ますます大変である。工事場の技術者は仕事の段取りのときから竣工まで、とまかく一定の場所に止まっておられるが専門的になった労務者は、その工種が現場に実施される間だけで引越さねばならぬ。たとえば、杭打ちの鳶(とび)職であれば、その人々は杭を打つ間だけで済み次第、他に移らなければならないのである。相当の熟練工で収入の多い人は、別に住居を構え独身で移動してやって行けるが、土木労務者仲間ですこまで出世し一業に打ち込む人は、数では全く少ないのが現状である。

欧米の工事現場等を見学して歩いてみると、アメリカあたりではこの比較的割りの悪い職場には黒人とカプエルトリコ人等が多いように見受けられる。欧州の先進国の土木工事が実にマンマンデーで、何年たってもできないのがよくあるようだが、予算措置その他明確な理由はもちろんあるのだろうが、現場の最下級の労務者が不足で仕事がなかなかかどらないのもその一原因かと考えられる節もある。むしろはかどらないから自然予算もつかないのではないかと思われる節がある。ビックリするような段取りをして、労務者がボツリボツリしか働らいておらぬ現場ほど恥かしいものは無いはずである。

非常に優秀な計画設計ができて、工事ができ上らないのでは何にもならない。土木技術者も労務を最小限度にとどめて完成するよう、計画設計のときから配慮しなければならぬ時節は遠き将来ではなく、必然的にやってくるような気がしてならない。土工の筋芝、張芝、土羽仕上げ、暗きょの呑口、出口の土止め方法、あるいは石張工、空石積工など単位当りの歩掛りの多いもので、研究すべき工種が沢山あるように思える。

また反面、土木の労務者の社会的地位向上というか、その面にも一層の工夫が必要でないかと思われるのである。労務者確保は一見漠たることで、語りあっても良い結論はなかなか出ないと思うが、もう少し労務者を大事にしなければ、せっかくの土木技術も思わぬ点でつまづくのではないかと、ころばぬ先の杖というようなことで申し上げた次第である。

* 正会員 本学会副会長